オーガストファンBOX
AUGUST FAN BOX
オーガストオフィシャルハンドブック
2004年秋号
AUGUST

まえがき

こんにちは。オーガストです。

２００４年８月２７日に『オーガストファンＢＯＸ』が発売となりました。
まずは、お買い上げ頂いた皆様に御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

また、発売からしばらく経ち、開発室にはアンケート葉書も毎日たくさん届いています。皆様から頂いたご意見の一つ一つをありがたく拝読し、スタッフ一同しっかりと受け止めております。

この「アンケート葉書」は、私たち制作スタッフにとって、数多くのユーザー様の声を聞くことができる本当に貴重な機会です。
なので、なるべく多くの方に、アンケート葉書をお送り頂きたいと考えております。

励ましのお言葉も、お叱りも、全て次回作への糧として参りますので、どうぞよろしくお願い致します。
また、既にお送り頂いた皆様には心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ頂ければ幸いです。

２００４年秋　オーガスト　拝

ザーッ
Singin′ in the Rain
べっかんこう
あちゃー。こりゃひどいタ立ねぇ
ザッ
ぎゃっ
この分だと、しばらくはやみそうにないですねー。
キー
あ、そうだ
かばんに折り畳み……

わたし、教室に置き傘があるから取ってくるねー

ダッ

あ

たたた

あら、久住傘もってるじゃない

えっと、ま、まぁ……

久住くんもしよかったらその傘……

私と仁科先生が校舎に戻るまで濡れないように、貸してもらえませんか？

世話焼きねぇ
たまにはいいじゃない
ザーッ
じゃ、帰ろっか
おう
ぎゅっ
えへ
おわり

～はにはにミニシアター～

はじめての香り

内田ヒロユキ

高く青い空に、いわし雲が浮かんでいた。

「なんだそりゃ？」

弘司の素っ頓狂な声が昼休みの教室に響く。

「そりゃって、見りゃ……わかるだろ……弁当、だよ」

「珍しいな、弁当なんて」

「ああ、まあ……ちょっとな」

弘司の言う通り、直樹が弁当を持参することは稀だ。

「どちら様が？」

「いや、えーと……」

（誰？）

（彼女？）

（同居？）

疑惑が波紋のように教室を伝播する。周囲からの生暖かい視線の中、直樹は弁当を布で包み直した。

「場所変えるわ」

「何か……悪いコトしたな」

「いやなに……目立つわな、こういうモンは」

申し訳ない、といった表情の弘司に声をかけて、直樹は席を立った。

廊下のヒヤリとした空気が首筋に心地よく、この時はじめて、直樹は自分が紅潮していることに気が付いた。

（やっぱ、教室じゃネタにされたか……）

右手の弁当を見遣り、ため息をつく。

ことの起こりは二日前。

茉理の両親が揃って旅行に行ったことにある。なんでも、旅行代理店に勤務する知人から、ツアーの穴埋めを頼まれたらしい。理由はともかく、四日間、茉理と二人きりの生活を送ることとなった。傍から見れば想像力を掻き立てられる状況だが、そこは従兄妹の二人だけに、何ということはない……わけでもない。

茉理は、何を思ったか、炊事を自分が担当すると言い出した。料理の腕は十人並みだが、年頃の女の子の手による料理だけに直樹も悪い気はしなかった。

同居する従妹を「年頃の女の子」と見ていた自分に、彼はまだ気付いていなかった。

＊

空のサファイアブルーをバックに、広葉樹の、わずかに黄色がかった緑が揺れた。程よく湿気をはらんだ風が直樹の髪を払う。

屋上は学生でにぎわっているが、幸いにして知人はいない。直樹はホッと胸をなでおろ

しつつ、ベンチで弁当の包みを開いた。
「おっ……」
思わず声を漏らした。
ゆかりご飯の柔らかい紫、
肉巻きアスパラの緑、
オムレツの黄色とケチャップの赤、
それらの鮮やかなコントラストが目に飛び込んだからだ。
「どう？」
弁当に影が落ちる。
顔を上げた直樹の前には茉理が立っていた。
「まだ食ってない」
「食べなきゃ評価できないでしょ」
言うなり直樹の隣に座る。遅れて、淡い花の香りがフワリと鼻腔をくすぐった。
（はじめての香りだ）
そう思いながら、直樹はプラスティック製の入れ物から箸を取り出す。
「茉理って、屋上派だっけ、昼休み」
「え？」
弁当のフタを開きかけていた茉理の手が止まる。
「たまたまよ……ホラ、今日は天気がいいでしょ」
「ん～まあ、そうな」
「つーか、食べて」
「ああ、うん」
再度促されて、オムレツに箸をつける。
表面にはチラホラと濃い狐色が見えたが、中はあくまで半熟。卵の豊潤な甘味から挽肉の塩気が顔を出し、ケチャップの酸味がアクセントを添える。
それらが、トロリと口中に広がるのだ。
「美味いな」
別れを惜しみながら嚥下し、直樹は答えた。
「ま、まあ、あたしが作ったんだしね」
などと言いつつ、茉理はつま先をレンガタイルの上でパタパタさせる。
「他のは？」
「ん、そうだな……」
直樹は、肉巻きアスパラを次なるターゲットに選んだ。細めのアスパラ、二、三本を豚肉で巻き、炒めたもので、あんかけ状の味付けが絡めてある。
口に放り込むと、みりんと醤油をベースに、ほのかなダシの香りが開いた。わずかに七味も入っているようだ。
アスパラは絶妙な火の通り方で、シャキリとした食感がすがすがしい。
続けざまに、ゆかりご飯を口に運ぶ。シソの爽やかな香りと塩気が、口の中をリフレッシュしてくれた。
その一部始終を、茉理の視線がさりげなく追っている。
「どう？」
「バッチリ」
「そ、そうかな」
顔を上げた茉理と目が合い、直樹は気恥ずかしくなって視線をそらした。
『あ～ん』とかやったら、マズイか」
茉理が苦笑しつつ言う。
「うはは、そりゃそうだ。誰かに見られたらクラスの人気者になっちまう」
「従兄妹だし、そういう風には……」
「禁断の愛テイストが加わって、5割増しで騒がれると思うが」

「あ、そかそか」
たははは、と笑う茉理の両手がベンチの縁をぎゅっと握っていた。
（いつもの茉理らしくないな……）
直樹の目には、こう映っていた。
「もしかして、『あ～ん』ってやりたいのか？」
「滅亡推奨」
「あそ」

彼の勘は外れた……とも言い切れない。
今、茉理の手はじっとりと汗ばみ、鼓動も速い。だが、それらを悟られないよう振舞っている。直樹の言動一つひとつに自分の感情を強く動かされているという事態に、半ば動揺に似た感覚を持っていたし、何より、そんな自分を直樹に見せたくないからだ。

「それよりさ、食えよ」
「は？」
「いや、弁当。時間なくなるぞ」
「あ、ああ、うん」
生返事をし、箸を持つが、正直なところ食欲がない。
茉理は、本日早朝の弁当製作ミッションで、朝食としては十分すぎるほどの味見を繰り返していた。ちなみに、オムレツはこれが4個目だ。なぜ、弁当つくりにこれほどの情熱を注げたのか、それは彼女にも判然としない。
ただ
（喜んでほしい）
という衝動は確実にあった。身も心も揺れに揺れている彼女のなかにあって揺ぎないものを挙げるとすれば、この一点に尽きる。

茉理は、もそもそとオムレツを咀嚼しながら空を見上げる。
高い空にいわし雲。
取り残されたような気分が胃の奥に湧き上がり、不意に目頭が熱くなった。
「ぐす……」
「どうした、風邪か？」
「かも」
「最近、急に涼しくなったからなあ。ちゃんと服着て寝ろよ」
「いつも、着てるし」
「寝込んだら『あ～ん』の刑な」
「アホ」
ぶすっとした表情で、茉理は肉巻きに箸を伸ばした。

二人が食事を終えたのは、十五分程経過して後だった。
「ふう、ゴチソウサマ」
「お粗末様でした」
「あのさ、明日はいいぜ、弁当」
「いいって、作らなくていいってコト？」
優しげな表情の直樹に、茉理は強い語気で応じた。
「ああ、大変だろ？」
「大丈夫だって」
「そうか？　今日だって、けっこう早く起きてたじゃないか？」
茉理は瞠目した。数瞬遅れて羞恥が彼女を包む。
二時間も早く起き、一心に弁当を作る様を目撃されたことを恥じたのではない。弁当を作るのに二時間もかかった自分、それを知られたことを恥じたのだ。
茉理が膝の弁当箱をきつく握る。
「でも、あたしが作るんだし、別に……」
「いや、だから」
悲しい、と茉理は感じた。直樹の言葉は、悲しくて、とても腹が立つ。
「じゃあ、他の人に食べてもらうから」
どの単語に反応したものか、一瞬で直樹の体温が上がった。
「それなら、俺が食う」
「いいよ、ムリしなくて。ホントは美味しく……」
「美味かった、絶対に」
「ふうん」
「ホントだって」
茉理にとっては意外な反応だ。嬉しく思うと同時に、ちょっとイジワルをしてやりたい気分になった。
「保奈美さんとどっちが美味しかった？」
「保奈美だろ」
「……」
「保奈美と張り合うなんざ、それこそ神に挑戦するようなモンだぞ」
「……はぁ～」
そんなことは茉理とて十分に分かっている。にもかかわらず、なぜ尋ねてしまったのか。彼女自身にも上手く説明がつかず、ため息が漏れた。
「なんだよ？」
「また早起きしなきゃってコト」
顔を見られるのが恥ずかしかったのか、茉理は勢いよく立ち上がった。
「じゃ先行くね。明日もココで」

「あ、おいっ」
汚れてもいないスカートを手で払い、校舎に続く階段へと歩き出す。
その背中に直樹の声が飛ぶ。
「包丁で手ぇ切るなよ」
「ド素人みたいに言うなっ」
突然の大きな声に、周囲の視線が集まる。
途端に茉理の頬に朱が差した。
（この屈辱、明日の弁当で晴らす）
握りこぶしを小刻みに震わせながら、仄暗い覚悟を胸に刻む茉理であった。

＊

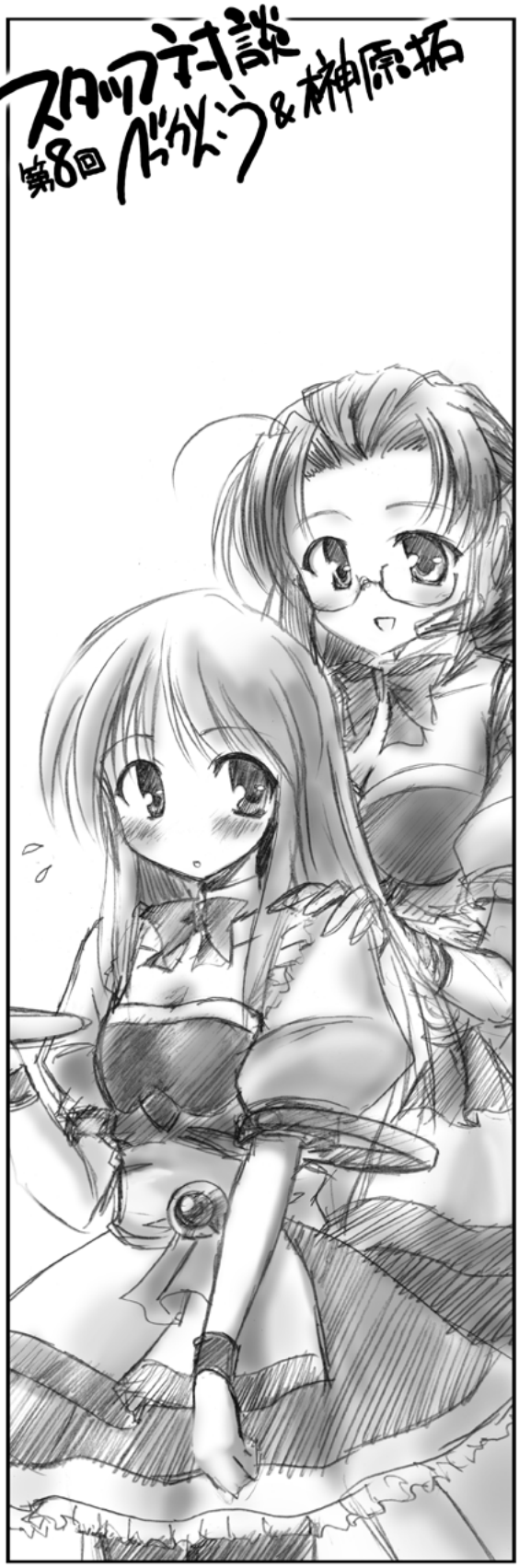
「茉理ちゃんに会ったか？」
教室に入るなり弘司に問われ、直樹は硬直した。背中を冷たい汗が伝い落ちる。
（誰かに見られたらしい）
隠れていたわけでもなく、仕方がないと言えばそうだが、今後のことを思うと胃がチリチリと痛んだ。
「直樹が出てってすぐ、辞書借りにきたんだけど」
「は？」
弘司の口から出たのは、予想だにしなかった単語だった。
無論、茉理は辞書の話などしていない。差し迫った事情があるなら忘れるわけもなく、別の理由があったと考えるのが穏当だろう。
下級生が上級生の教室に顔を出すには、かなりの勇気がいる。それほど重要な用件とは何だったのか？
（もしかして、弁当の味を……）
この結論には、何となく確信が持てた。
「ああ、辞書なら、さっき廊下で会った時、必要なくなったって言ってた」
「なら良かった……お、そろそろチャイム鳴るな」
直樹と親しい弘司だけに、何かを感じ取ったのかもしれないが、彼は追及することなく話題を変えた。
「五時間目ってなんだっけ？」
「フカセン」
「うへぇ」

蓮美台学園にチャイムが鳴り響く。
窓枠にいた赤トンボが、かすかな音を立て、高い空へと吸い込まれていった。

終

べっかんこう(以下べ)：こんばんは。べっかんこうです。
榊原拓(以下榊)：こんばんは。榊原です。
べ：そろそろ、対談の始め方にも変化がほしいですね。
榊：私が空から降って来るとかですか。
べ：すいません。今のままでいいです。
榊：えー……さて、オーガストファンBOXがついに発売となりました。
べ：まずは買い上げ頂いた皆様、本当にありがとうございましたー。
榊：ありがとうございましたー。さて、アンケート葉書が続々と届いてますので、少し見てみましょう。
べ：たくさん届いてますね。
榊：まず、ぶりぼんが好評でした。
べ：うちらもやり込みましたよね。
榊：安西君がいつまで経ってもクリアできませんでしたが、実は私もかなり苦労した記憶が……。
べ：僕はサクッとコンプしましたよ？
榊：脳みそホエホエさんの絵もマッチしてましたよね。
べ：かわいい絵をありがとうございました。
榊：あとは、特製ブックレットも大人気です。146ページ。
べ：徹夜でラフ集ページを作ったので、嬉しいです。
榊：確か一番忙しい時期なんですよね、ラフ集って。
べ：それ以前に、ディアナ様はラフがほとんど残ってなくて大変でした。柚香も。
榊：ブックレットには、過去の小冊子が再録されているのもご好評を頂きました。個人的には、レティの修行日記が思い出深いです。
べ：アドベンチャーパートはどうでしたか？ 委員長とか。
榊：嬉しいことに、委員長シナリオは保奈美や美琴シナリオに勝るとも劣らない結果です。
べ：正直、ここまで人気が出るとは思ってなかったので、嬉しい反面少し戸惑ってたり。
榊：あとは、やっぱりHありのシナリオが強かったです。
べ：時間があれば、もっと増やしたかったですね。
榊：ご意見ご感想欄ですが……意見が真っ二つのものが多いです。ぶりぼんが強い/弱いとか、クイズが簡単/難しいとか。DVD希望という方と、DVDドライブが無いので助かるというご意見もありました。
べ：ありゃ、困りましたね。
榊：バイナリィ・ポットのコンテンツが少ないってご意見は多いんですが、一方ではプレイしたことがない方もかなり多かったりして。
べ：む、難しいなぁ……。なるべく多くの方のご意見を生かせるようにしたいですね。
榊：ユーザー登録葉書はまだまだ募集中ですので、よろしくお願いします。
べ：できれば感想も沢山書いてもらえると嬉しいです～。

2004.9.17 AM0:20 社内にて



あとがき

最後までお読み頂き，ありがとうございました。

現在，オーガストでは次回作の企画が急ピッチで進んでいます。
当初はもっと早い時機に進めておくべきだったのですが，オーガストファンＢＯＸの制作に全力を傾けていたため，なかなか本腰を入れることができませんでした。

恐らく，皆様がこの号をイベントにて入手された頃には，制作序盤の山場「キャラクター命名会議」が終わっていることでしょう。
キャラクターの名前を決めるのは，実は大変な作業です。
多くの方々に認知してもらい易いこと。広報展開上の様々な制約や要求に応えていること。キャラクターの内面を間接／直接的に表していること。世界観に合っていること。そして，命名する私たちスタッフが，そのキャラクターを好きになれる名前であること。
新しいアイデンティティを確立し，そのキャラクターに息を吹き込むのが，この「命名会議」です。
毎回かなり揉めますが，今回はスムーズに決まりますように。

それでは，今回はこの辺で。
今後とも，オーガストをよろしくお願い致します。

２００４年１０月１１日
オーガストスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック 2004年秋号

最新情報満載！オーガストオフィシャルHPにぜひお越し下さい♪
http://august-soft.com/

オーガストオフィシャルハンドブック 2004年秋号

AUGUST

(C) 2004 AUGUST ALL RIGHTS RESERVED.